

## 『東日本大震災を通して』

3年1組 瀬谷 光瑠

2011年3月11日、東北地方を震源とした東日本大震災が起きました。あれからもう8年もの月日がたってしまいましたが、あの日のことは、しっかりと記憶に残っています。

当時まだ6歳だった僕は、その日、幼稚園にいました。ガタガタというすごい揺れと同時に「机の下にもぐって」という先生の大きな声が聞こえてきました。その声の大きさと、強い言い方に今、大変なことが起きているのだということを感じました。長い揺れが、少し収まると僕たちは先生たちに連れられて園庭に避難しました。

怖がって泣いている子供たちを安心させようと先生たちがお菓子をくれたことを覚えています。それからしばらくして、母が幼稚園まで迎えに来てくれました。母の車で家に帰る途中に見た、古殿町民体育館は、窓ガラスはすべて割れ、あたり一面にガラスやごみが散乱していました。その様子を見て改めて事の重大さを知りました。

けれど、地震よりも大変なことが起きていたことを当時の僕は全く理解していませんでした。それは、福島原子力発電所の爆発です。

僕たちは、放射能の被害を避けるために、母のおばさんの家がある静岡に避難することになりました。

静岡は、気候も穏やかで、近くに雄大な富士山を眺められる景色のとても美しいところです。しかも、地震の影響も全く感じられず、僕にとっては親戚の家に遊びにきた感覚しかなかったもので、毎日がとても楽しい生活でした。



しかし、そんな避難生活も終わり、父が静岡まで僕たちを迎えに来てくれた時のことです。古殿に向かう帰り道で、父が何度も何度も、いろいろなガソリンスタンドに立ち寄りとうとするのです。不思議に思った僕は

「なんで何回もガソリンスタンドに寄っているの。早く帰ろうよ。」

と父に言いました。けれど父は何も答えず、また次のガソリンスタンドに向かっていくのです。そうして、何回もいろいろなスタンドに立ち寄りながら、ようやく古殿に帰ってきました。

最近になって、道德の時間に先生が東日本大震災の話をしてくれました。その中で静岡の方では、福島県からの車は、放射能の影響があるからと、「福島ナンバー給油お断り」という看板を出していたスタンドがあったということをお話していました。また、避難のために転校した生徒の中には「放射能」というあだ名をつけられ、いじめの対象になって戻ってきた生徒もいたことを知りました。

その時、僕はあの時の父の行動がやっと理解できました。そして、人間は残酷だなと思いました。もちろん、自分の身を守りたいという気持ちはわかります。けれど、震災で苦しんでいる人にそんなひどい差別をすることは許されないことだと思います。父も本当に悔しかったと思います。そして、多くの福島県の人々が傷つき悲しい思いをしたのだらうと思います。

もちろん、福島の人だからといって差別せずに給油してくれたスタンドや積極的に福島の復興のために手を貸してくれた人もいたはずですよ。

だから僕は、人を差別したり、誤解から人を傷つけたりするような人間には、なりたくありません。困っている人や苦しんでいる人がいたら、進んで手助けをしてあげられるような人になりたいと思います。